

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390101170		
法人名	有限会社 ヒューマン・ケア		
事業所名	グループホームヒューマンケア富合 さくらユニット		
所在地	熊本県熊本市南区富合町廻江829番地		
自己評価作成日	令和5年3月13日	評価結果市町村受理日	令和5年5月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺3丁目15-1		
訪問調査日	令和5年3月29日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「運営理念から外れた介護は行わない」。事業所の根幹を大事に守り育てながら、10年事業を継続することが出来ました。地域の環境も徐々に変化を見せる中、これまでの地域の方に支えられ、入居されている方とご家族に支えられ、スタッフに支えられ、事業所として成長もし、もちろん失敗もした期間であったと振り返ることが出来ます。入居する方の安全や安心を守る自負はありますが、入居する方の様々な過程を辿る生活は 長い生活になるほど身体介護の増加は避けることの出来ない現実です。それでも日々の些細なことで苦悩し、気づけたことの喜びを分かち合い、「その人らしさ」を見出して行く。この繰り返しを行えていることが、当事業所の特徴と言えます。現在の介護保険制度は看取り介護を前提とした取り組みを求められますが、超高齢社会から「多死社会」を迎えていく時代に、医療機関との連携は必要不可欠です。人の尊厳を考えられる事業所として、今後様々な取り組みを検討、実施出来るよう目指します。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

日頃から理念の浸透を図り、課題が生じた際は理念を念頭に置いてカンファレンスやミニカンファで検討し、ケアの統一を図っている。カンファレンスでは業務改善や職場環境等についても多くの意見・提案等が出され、記録を手書きからパソコン入力に変えたり、職員の休憩室を作ったり、車いすが乗れる車を買ったりと、職員の意見を柔軟に取り入れている。また、本人の意向に沿った支援を大切にしており、本人・キーパーソンと十分話し合い、安全に十分配慮した上で、毎日午前・午後1時間ずつ、1人で自由に散歩をしている入居者もいる。コロナ禍で外出の機会は減少しているが、感染状況を見ながら季節の花見やドライブを楽しみ、気分転換を図っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	運営理念は入職時に管理者が伝達するとともに、普段も職員が目に入る場所に掲示している。また、カンファレンスを行う時には運営理念を根拠にケアが行われるよう振り返るように働きかけている。	理念は、各ユニットに掲示し、職員への浸透に努めている。月2回のカンファレンスや、ケアの中で都度行うミニカンファでは、理念を念頭に置いて課題について検討を行い、ケアの統一を図っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で地域との交流を選ばざるを得ない中、管理者を軸に、地域との繋がりを事業所として維持している。働くスタッフが持っている地域との繋がりが入居者の方の生活に繁栄出来る仕組みを考えていきたい。	コロナ禍で、地域の行事等が減少し、以前のように地域との交流はできていないが、町内会に参加して回覧板で地域の情報を得ており、今年はずいぶん参加している。近くの保育園児と直接触れ合っただけの交流はできないが、ホームの庭を開放しており、園児たちが時折お散歩がてらホームに来て庭で遊ぶ光景を眺め、声を掛けたりしている。富合の防災連絡会にも参加するなど、少しずつ地域の各種団体などが活動を再開しており、行事や地域活動に積極的に参加していきたいとしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	管理者が認知症サポーターキャラバンの資格保持しており、地域の民生委員や自治会などで認知症サポーター養成講座を開催し認知症への理解を求める活動を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	当事業所もクラスターが発生し、委員との対面での開催が困難な状況が続いている。紙面にて事業所の現状報告を定期的に行いつつ、上がった意見の中で事業所として必要であれば委員に直接話を伺い、実行できるよう心掛けている。	今年度の運営推進会議は、全て書面での開催となっている。委員に現状報告の資料と意見・提案等を記載する用紙を持参し、繋がりを保つよう心掛けている。	運営推進会議の資料には、ホームでの暮らしが分かるような、入居者の日常や行事等の活動内容を盛り込むことも期待される。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域包括支援センターの職員と連携し、定期的な会議を行っている。ホームの実情を報告したうえ、地域の課題や認知症の理解啓発に努めている。	市とは、介護保険の更新・コロナ関係の情報収集や、メールで運営上の質問をするなど連携を図っている。また、地域包括支援センターを中心とした、富合圏域多職種連携会議や、まちの輪ネット等に参加し、地域の高齢者福祉の充実やまちの活性化などの活動に連携して取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年に2回の社内研修を行うことと共に、オンライン研修を活用しながら定期的なケアの振り返りを委員会で協議している。普段の何気ないケアから問題提起できる場をもっと増やし、管理者自らもスタッフのアセスメントを確認するよう努力している。	年2回の社内研修で拘束の定義・権利擁護と虐待等について学んだり、3か月ごとの身体拘束防止委員会でグレーゾーンの事例について検討するなどして、身体拘束をしないケアについて意識の浸透を図っている。職員ができるだけストレスなく仕事ができるよう、管理者は職員の表情を見て声を掛けたり、カンファレンスでお互いにフォローしあうことを話し合い、ストレスケアに努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	昨今の介護現場における報道から監視カメラの必要性は共感できるものはある。しかしながら、真摯に取り組んでいるスタッフの萎縮は避けたいと願う。そう思えるほど、当事業所のスタッフは介護に真剣で楽しむ事を知っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	運営推進委員に、縁ある社会福祉士に協力をもらっている。福祉の法律理解や権利擁護・後見制度についての研修もお願いしている。社会通念上を踏まえた上での「契約」に、ご本人とご家族に不利が働かないよう助言をもらいながら、必要に応じて個別に相談し、適切な対応になるよう心がけている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に、理念やどのような介護サービスが出来る出来ないか、医療に対する事業所の考え方、個人情報、金銭を含むご本人にとっての貴重品管理を含めた取り扱いを詳しく説明した上で入居して頂くよう努めている。また、介護保険制度の改定の際は難しいが、事業所運営の改定を行う場合は、30日を前後に通知する努力を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見や要望を伝えることが困難な方が多い中、言動から気持ちを汲み取れるようスタッフ間で情報共有に努めている。また、ご家族からの意見要望については「正面から上がってはこない」を理解した上で、発する言葉に意味を考えながらケアを提供し、その評価を確認しながら意見の反映とさせてもらっている。	現在、面会は予約した上で月に1度、交流室で行うことができ、面会時や電話で入居者の近況報告を行い、意見・要望等を尋ねている。また、毎月請求書と一緒に入居者の近況を記したコメントと写真を送り、家族の安心に繋げている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	安定した運営は、スタッフのモチベーションや労働環境が重要と考える。代表者、管理者ともに労働環境の改善について常に考え、長く勤められる環境を模索している。スタッフの入れ替わりがケアの変化を生むので、スタッフの意見や個性を認め、新たなケアを生み出す努力をしている。	月2回のカンファレンスや、課題が生じた都度行うミニカンファで、入居者のケアのこと、業務改善、職場環境等話し合い、検討している。職員から意見・提案等多く出されており、ケアのことはもちろん、記録を手書きからパソコン入力に変えたり、リネン室に冷暖房をつけ、テレビを置いて職員の休憩室を作ったり、車いすが乗れる車を買ったりと、職員の意見を柔軟に取り入れ、業務改善や環境整備等を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、コロナ禍前では定期的にスタッフ個人と会話を、時には手紙で激励し、感謝をもって接している。給与水準や労働時間には課題はあるが、可能な限りそれぞれの家庭環境にあった働き方になる努力をしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍で法人外への研修は控え、リモート研修を薦めている。法人内での研修については、スタッフの日々の業務による疲労を踏まえて出来る時と判断した時に提案し実行している。言葉での申し送りやカンファレンスでスタッフの意見を確認しながら、解決もしくは理念に沿ったケアに進める働きかけを行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	富合町圏域での毎月行われる多職種連携会議で交流を図っている。また地域包括支援センターと連携し、地域の様々な高齢者のケースに触れながら、必要に応じてではあるが、他事業所と連携しながら、地域で生活できる環境を構築する努力を行っている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご本人が入居される前に生活歴や現在の状態などの情報を本人や家族、前施設職員などに聞き取りや情報提供していただく。そうした情報はスタッフ間で共有をしている。入居されてははじめ新しい環境に慣れていくことやなじみの関係を作っていくことを優先している。またカンファレンスを随時開催し今後のケアについても話し合っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居の際はご家族の要望や心配に思っていることを確認し、ホームで生活を行う上で起きうることなどをお伝えしている。状態変化が起きた際はもちろんの事、入居してからの本人の状態や生活状況などの連絡をこまめに伝えるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人やご家族がやりたいことやしてほしい事など望んでいるものは何なのかを考えていき、今ご本人にとって何が必要なかを場合によっては専門的な立場からの意見も取り入れつつ検討、提案を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者の意思を尊重し、職員は一方向的にこちらから手助けをしてあげるのではなく、お互いに生活をしていくうえで助け合い、学び、支えあっていくような関係を築き上げていけるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	現在世界の感染症の流行によってなかなか本人とご家族との交流は難しい状況である。面会は回数制限、人数制限を行っているが、オンライン面会を行い遠く離れたご家族とも面談できるようにしている。また本人の状態を管理者からご家族へ随時連絡をしている。ご家族と本人の関係が経ち切れてしまわないよう努めていく。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人が住み慣れた地域や思い出のある場所など外出を行うことは難しい。本人の今まで送ってきた生活から慣れ親しんだものや思い出のものを居室に配置している。面会も難しい状況にあるためオンライン面会を中心に本人とご家族の関係が経ち切れてしまわないように努めている。	以前は、入居者の自宅に行ったり、馴染みの風景を眺めにドライブしていたが、コロナ禍の現在は、家族とのオンライン面会や電話での会話を通して馴染みの関係継続支援を行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者が孤立してしまわないような環境を作るよう努めているが、本人の気持ちや要望を尊重し個別ケアを中心にケアに臨んでいる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	看取りを行ったご家族に対し、継続的に連絡を行い、必要であれば家族の心のケアを行っている。ご家族のロコミなどで次の入居へつながっているところもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人様やご家族様と面談を行い、意向や要望を聞きスタッフカンファレンスを行いながら、出来る限りケアに反映させている。また、意思疎通ができない場合であっても、ご家族様より情報を得て、ご本人様の仕草や行動を観察し意向の把握に努めている	自ら思いや意向を言える人は少なく、生活歴の記録を確認したりや家族に聞いて好きなことなどを把握している。毎日散歩をしたい人は本人了承の下、リスク回避のためGPSを装着してもらい、一人で午前・午後1時間ずつ、自由に散歩をしている。キーパーソンと協議し、10分ごとに所在地を確認し、時間が来たら迎えに行くこととしており、安全に十分配慮した上で、できるだけ本人の意向に沿った支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	紹介先や担当の先生からの情報提供書をもとにスタッフ全員が閲覧、共有し入居前に生活状況を把握している。入居後混乱なく生活できるよう、入居前カンファレンスを行い、ケアの統一ができるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	経過記録、申し送りノート、毎日のバイタルチェック等でご本人様の状態の観察を行い、情報を共有している。状態変化があればすぐにカンファレンスを行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者が主となり、各入居者個人ごとに担当を設けてモニタリングを行い、その結果を話し、計画案をユニット毎で話し合い管理者に確認をしている。その上で計画作成がご家族に次の計画の提案を行うようにしている。現在は郵送がほとんどなので、ご家族からの意見を直接確認することが出来ないが、徐々に行って行きたい。	3ヶ月に1回、担当者がモニタリングを行い、ケアマネージャーが主となり、担当者で協議しながら半年ごとに計画を見直し更新している。入居前の施設のケアマネージャーや地域での情報なども大切に、その人らしさがわかるような計画作成を心掛けている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ご本人様の日々の様子や行動、言動等は、必ず記録をし、今後のケアに反映できるように情報を共有している。気づきや工夫等があればカンファレンスを行い実践できるよう努めている		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人様のニーズに応じた個別ケアを行えるよう対話する際にはニーズがキャッチできるよう努めている。ご家族とは、連絡を取り合い常に話が出来るような環境を作っており、何か環境の変化があれば、柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源の把握はしており、地域における活動は徐々に元通りの状態に戻ってきてはいるが、いまだ活動参加に至っていない。園庭が狭い保育園の子供たちへの庭の提供を行い、入居者様の癒しになっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期往診、臨時往診を依頼し状態変化や健康管理は24時間協力医療機関と連携を取り受診等を受けられるよう環境を整えている。	入居時に、全員が協力医をかかりつけ医としており、月2回の往診を受けている。また、訪問看護ステーションとの契約で、24時間の連絡体制を確保し、週1回、全員が健康チェックを受けている。かかりつけ医との連絡・調整も密に図られ、適切な医療支援が行われている。ホームには現在、看護師が1名配置されているが、4月以降2名配置となり、さらに安心の体制となる予定である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職や定期的な訪問看護への報告・連絡・相談等を行い、健康管理・状態変化を共有し、看護・介護両方の面から入居者が安心して過ごせるケアを行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時はホームでの生活状況の情報提供を行い、入院中本人が少しでも混乱なく入院生活が送れるよう申し送りを行っている。少しでも早く退院できるよう、協力医と連携して受け入れ態勢を整え医療・介護両面から本人を支えることができるよう支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約の時点で家族に看取り指針の説明・同意を得ている。ご本人や家族の意向をお聞きしご本人が安心して最後を迎えることができるよう、かかりつけ医・家族・ホームで一体となって支援できるよう努めている。	「看取り指針」を作成しており、入居時に家族に説明し、意向を確認している。重度化した際には、主治医から家族に適宜状況を説明し、主治医・訪問看護と連携して看取りケアにあたっている。看取り後は振り返りを行い、より良いケアに繋げている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変・事故発生時のマニュアルがあり定期的な確認・周知を行い、協力医療機関や看護師から対応方法・注意点を指導してもらっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災士の資格を持ったスタッフを中心とした総合訓練や、災害時の対応方法の周知を行っている。また備品のチェックを定期的に行っている。令和6年度からBCP作成が義務付けられるが、今年1月に発生した新型コロナウイルスのクラスターを経験し、地域の応援もお願い出来ない中、対策の必要性を痛感した。	年2回、火災の通報・避難・消火訓練を行っており、今後は災害時の訓練も行なって行きたいと考えている。台風・ゲリラ豪雨等への対策は垂直避難が必要として、ホーム2階に緊急避難所をつくり、食料やオムツ等の備蓄・段ボールベッド等を整備する予定である。	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者個々に合わせた声かけを行っている。そのためには職員間で情報共有している。また、排泄や入浴の声掛けは周りの環境にも配慮し本人が嫌な思いをしないよう心がけている。	権利擁護に関する研修を受けており、人生の先輩として入居者を尊重する姿勢を共有している。名前の呼び方は、基本は苗字にさん付けだが、本人がこれまで慣れ親しんできた呼ばれ方など、それぞれにとって心地よい呼び方をするようにしている。また、排泄の声掛けは耳元で小声で伝えるなど、プライバシーに配慮した対応を心掛けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人のペースで自己決定ができるよう、話を遮ったり急がせたりしないよう心がけている。自分で決めることができなくても多くの提案をし本人が納得する形で決定できるよう工夫している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人の生活リズムを崩さずその人のペースで一日を過ごせるようにしている。どうしても必要なケアの際は声かけをしてすぐれない場合は無理強いをしない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	一人一人に合った身だしなみやおしゃれをできるように支援している。朝の顔洗いができなくても顔拭きや櫛を通してもらえるよう準備して声掛けしている。おしゃれも着る服を選んでいただき袖を通すなどできないときは介助している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	アレルギーや嗜好品を把握し、調理担当職員が彩や食べやすさを考慮し食事を作っている。季節ものを取り入れ季節感が分かるよう工夫している。また、入居者に野菜切りや食後の茶碗拭きも職員と一緒にしている。	調理担当職員が献立作成・買い物・調理を行っており、旬の食材を取り入れ、彩り豊かで美味しい食事が提供されている。家事が好きな人は野菜切りをしたり、季節ごとの行事食の提供や、干し柿作り・梅干し作りなど、食を楽しむ支援も行われている。職員が交替で検食を行い、検食簿に記入して食事の更なる改善に反映している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取量、水分量を記録し職員間での情報共有している。本人様の状態を見ながら水分や食事を摂取できるよう、嗜好品を提供したり工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは本人のタイミングで声かけ行いしてもらっている。義歯を使用している方は、就寝前に預かり洗浄している。定期的な歯科口腔チェックも実施している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居者それぞれに合った下着やおむつを使用している。それぞれの排泄のパターンを把握しながら失敗が無いよう職員からも気がかけて声かけをしている。また、皮膚状態も見ながら清潔保持に努めている。	日中は、ほとんどの方はトイレに誘導して排泄の自立支援を行っている。寝たきりの方はベッド上で清潔にしてオムツ交換を行っている。カンファレンスで話し合いながら、経済的負担も考慮してそれぞれに適切な排泄用品について検討している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	入居後排泄パターンなどの確認を行いチームで情報共有を行っている。便秘にならないよう、水分補給は1日1500cc目標にして、体操や散歩などの声掛けを行っている。場合によっては医療と連携し適切な服薬処方をしてもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の日程は、あえて決めていない。本人の意思表示を重視して、入浴未実施日が多くなった場合は、代替ケアを行い皮膚疾患や陰部の不衛生にならないよう心掛けている。	入浴は基本的に週3日行っている。入浴を好まない方には、家族の言葉かけなどの協力も得て入浴を促している。2人介助やリクライニング車いすを利用して寝た状態でも入浴できるように環境を整備して、できるだけ清潔に保つよう努力している。音楽をかけたり、菖蒲湯やゆず湯など、入浴を楽しむ支援も見られた。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの入浴時間帯などの希望に近い状況に合わせた声かけを行っている。無理強いせず、気持ちよかったと思ってもらえる環境を作っている。		
47		○服薬支援 一人ひとり使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	提携薬局から随時服薬時の注意事項や副作用などの指導を受け、誤薬が無い、飲み残しが無いかの確認、頓服、新しい処方場合は職員間での情報共有をしっかりと行い様子観察し主治医に状態報告している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	これまでの生活で好きなこと、楽しみなことを把握し、一つでも多く楽しめる事を継続できるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	少しでも希望に沿った外出支援に繋げるため日ごろから利用者とコミュニケーションをとっている。散歩が趣味の方については、ご家族と協議してGPSを使用し時間を決めて散歩を楽しめるよう配慮している。	日頃は、散歩や日光浴で気分転換を図っている。コロナ禍で外出の機会は減少しているものの、感染状況を見ながら、季節の花見やドライブに出かけている。新年度は、外出の機会を増やしていくとともに、家族の協力を得ての個別支援等も行なっていきたいと考えている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金の所持したり使えるように支援している	自身でのお金を管理することは困難なためホームでの管理を行っている。世界的な感染症の流行から行うことは難しくなってきたが、本人が欲しいものや外出をした際に購入、使用したいものがあればご家族へ報告を行ったうえで預り金から本人に支払いをして頂いている。難しい場合はスタッフが行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望があればご家族へ電話、オンライン面会を実施している。感染症の流行から面会制限を設けているため面会以外にもご家族からの希望があればオンライン面会を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	場所や自席など入居者が分かりやすいように標識や目印になるものを設置している。また季節ごとの花や飾り付け、イベントを行って季節感を感じていただいている。朝夕気温の寒暖差が激しいのでスタッフ温度計など確認しながら調整を行っている。	日中はそれぞれリビングの好きな場所で、テレビを見たり、絵をかいたり、脳トレをしたりと、好きなことに取り組んでいる方が多い。廊下には美しい風景写真を掲示し、ところどころに椅子やソファを置いて休憩できるようにしたり、トイレへの道筋を矢印で分かり易いように示したり、自室が分かりにくい人の部屋には目印をつけるなどの工夫が見られた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにスペースを設けており、そのスペースや各居室を一人になりたいときは利用されている。また、レクリエーションなどで入居者同士の交流を行ったりしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際には家具や衣服、バッグなど本人のなじみのあるものを持参していただき、出来るだけ以前の生活に近い環境で安心して生活が出来るように工夫している。	部屋にはクローゼットが取り付けられ、タンス・テレビ・ラジカセ・衣装ケース・時計・家族の写真などを持ち込み、配置している。夫の写真と位牌を置いている人もおり、それぞれに過ごしやすい部屋づくりが見られた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自室や風呂場、トイレなど場所が分かりやすいように文字だけでなくイラストや目印になるものを併用して表示をしている。手すりや設置物を利用して歩ける方は見守りのみを行いなるべく自身で歩いていただけるようにしている。自立歩行、車いすなどそれぞれが安全に過ごしていただけるように環境づくりに努めている。		

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390101170		
法人名	有限会社 ヒューマン・ケア		
事業所名	グループホームヒューマンケア富合 のぞみユニット		
所在地	熊本県熊本市南区富合町廻江829番地		
自己評価作成日	令和5年3月13日	評価結果市町村受理日	令和5年5月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺3丁目15-1
訪問調査日	令和5年3月29日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「運営理念から外れた介護は行わない」。事業所の根幹を大事に守り育てながら、10年事業を継続することが出来ました。地域の環境も徐々に変化を見せる中、これまでの地域の方に支えられ、入居されている方とご家族に支えられ、スタッフに支えられ、事業所として成長もし、もちろん失敗もした期間であったと振り返ることが出来ます。入居する方の安全や安心を守る自負はありますが、入居する方の様々な過程を辿る生活は 長い生活になるほど身体介護の増加は避けることの出来ない現実です。それでも日々の些細なことで苦悩し、気づけたことの喜びを分かち合い、「その人らしさ」を見出ししていく。この繰り返しを行えていることが、当事業所の特徴と言えます。現在の介護保険制度は看取り介護を前提とした取り組みを求められますが、超高齢社会から「多死社会」を迎えていく時代に、医療機関との連携は必要不可欠です。人の尊厳を考えられる事業所として、今後様々な取り組みを検討、実施出来るよう目指します。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	運営理念は入職時に管理者が伝達するとともに、普段も職員が目に入る場所に掲示している。また、カンファレンスを行う時には運営理念を根拠にケアが行われるよう振り返るように働きかけている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で地域との交流を選ばざるを得ない中、管理者を軸に、地域との繋がりを事業所として維持している。働くスタッフが持っている地域との繋がりが入居者の方の生活に繁栄出来る仕組みを考えていきたい。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	管理者が認知症サポーターキャラバンの資格保持しており、地域の民生委員や自治会などで認知症サポーター養成講座を開催し認知症への理解を求める活動を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	当事業所もクラスターが発生し、委員との対面での開催が困難な状況が続いている。紙面にて事業所の現状報告を定期的に行いつつ、上がった意見の中で事業所として必要であれば委員に直接話を伺い、実行できるよう心掛けている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域包括支援センターの職員と連携し、定期的な会議を行っている。ホームの実情を報告したうえ、地域の課題や認知症の理解啓発に努めている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年に2回の社内研修を行うことと共に、オンライン研修を活用しながら定期的なケアの振り返りを委員会で協議している。普段の何気ないケアから問題提起できる場をもっと増やし、管理者自らもスタッフのアセスメントを確認するよう努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	昨今の介護現場における報道から監視カメラの必要性は共感できるものはある。しかしながら、真摯に取り組んでいるスタッフの萎縮は避けたいと願う。そう思えるほど、当事業所のスタッフは介護に真剣で楽しむ事を知っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	運営推進委員に、縁ある社会福祉士に協力をもらっている。福祉の法律理解や権利擁護・後見制度についての研修もお願いしている。社会通念上を踏まえた上での「契約」に、ご本人とご家族に不利が働かないよう助言をもらいながら、必要に応じて個別に相談し、適切な対応になるよう心がけている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に、理念やどのような介護サービスが出来て出来ないか、医療に対する事業所の考え方、個人情報、金銭を含むご本人にとっての貴重品管理を含めた取り扱いを詳しく説明した上で入居して頂くよう努めている。また、介護保険制度の改定の際は難しいが、事業所運営の改定を行う場合は、30日を前後に通知する努力を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見や要望を伝えることが困難な方が多い中、言動から気持ちを汲み取れるようスタッフ間で情報共有に努めている。また、ご家族からの意見要望については「正面から上がってはこない」を理解した上で、発する言葉に意味を考えながらケアを提供し、その評価を確認しながら意見の反映とさせてもらっている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	安定した運営は、スタッフのモチベーションや労働環境が重要と考える。代表者、管理者ともに労働環境の改善について常に考え、長く勤められる環境を模索している。スタッフの入れ替わりがケアの変化を生むので、スタッフの意見や個性を認め、新たなケアを生み出す努力をしている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、コロナ禍前では定期的にスタッフ個人と会話を、時には手紙で激励し、感謝をもって接している。給与水準や労働時間には課題はあるが、可能な限りそれぞれの家庭環境にあった働き方になる努力をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍で法人外への研修は控え、リモート研修を薦めている。法人内での研修については、スタッフの日々の業務による疲労を踏まえて出来る時と判断した時に提案し実行している。言葉での申し送りやカンファレンスでスタッフの意見を確認しながら、解決もしくは理念に沿ったケアに進める働きかけを行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	富合町圏域での毎月行われる多職種連携会議で交流を図っている。また地域包括支援センターと連携し、地域の様々な高齢者のケースに触れながら、必要に応じてではあるが、他事業所と連携しながら、地域で生活できる環境を構築する努力を行っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前からご本人の生活歴や現在の状況等をご家族やケアマネージャーより情報収集し、必要によって動画等も取り入れ、ユニットチームで共有している。ご本人の不安なことや要望等をしっかりと聞き取り、何よりも安心して生活していただけるように注視している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居するご本人と支えるご家族のこれまでの関わりで見える不安と、入居初期に起こるかもしれない状況に対応するスタッフがご家族に伝えたくて、不安や要望が表出しない事をホームは理解し、いつでもSNS等で情報を共有できる安心感を持っていたけよう努力している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	生活する空間が大きく変化する新しい場所への移動は、認知症高齢者にとっては大きなダメージが伴うことが予測される。ご本人に出来る事を直接支援出来るご家族と、したくても出来ないご家族と、様々な社会的状況が介護関係を作り出す今、「その時に必要とするサービス」は、スタッフの意見を参考にしながら、ケアの方向性をご家族に確認している。事業所単体で出来ないと判断した場合、他のサービスも検討するようになっているが、制度上の課題は事業所の課題であり、仕組みづくりの再構築を柔軟にさせていただきたいと考えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご本人が何かの行動を失敗する可能性を考える、要望通りに対応するとますます対応が困難になる、と言った考えでケアに当たるとついつい準備をしすぎ、介護される立場の環境を生み出しがちであり、出来る力を奪うことがあると理解することが大事である。その中で可能な限りご本人の生活リズムを大切に、望まれる環境を作る努力をしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍でご家族の面会が難しい状況が続いているため、ご本人の日常の様子等は電話で報告や連絡を行い、ケアにあたる上で予測される課題等を共に考えている。場合によってはご本人の安心にご家族の力が必要な時は、SNS等も活用し、協力を得られやすい工夫をしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	住み慣れた地域での活動は実現したいが、スタッフの人員、対応能力等やその後に与えるご本人の影響等を考慮してしまい、困難であると考えられる場合が多い。ご家族からの情報を得て写真を飾ったり、生活史を話題にしたりして、その場で馴染みの場や人との関係をつなぐ努力を行っているが、出来る支援は出来る時に行うことが望ましい。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	生活の場として孤立しない環境づくりを心掛けてはいるが、相性が大きく影響するケースが多く、お互いが認識できる距離を考えるようにしている。その中でも各入居者同士で自然にちょっとした会話を楽しんでいる姿が確認出来ている。今後も安心してくつろげ、ゆったりと関わりあえる空間を提案したい。何よりその場面を喜んでくれるスタッフも支援していきたい。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	看取り介護支援を共に行ったご家族が入居されたり、入居されたご家族から紹介をいただいたりとか何かとご縁をいただいている。場合によっては、お話をいただいたケースから、介護サービスに繋がるケースもあるので、普段の会話を大事に、提案を含めながら支援するよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居相談を受けるケースの場合、緊急的に対応が困難な場面が多いので、入居できる場合においては措置的な対応になりがちである。その中でも入居されたときは、可能な限りご本人やご家族の意向や希望を確認し、本人本位に実現できる方法を模索している。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	以前であれば、入居するご本人の環境が大きな変化を伴う為に特に生活歴を意識することを省略しがちであったが、介護保険制度を理解する方々が増え、ご本人やご家族からしっかりとニーズを確認することが多くなった。そのことを念頭にしっかりと在宅時の担当ケアマネージャーや関係者から情報を収集し、スタッフ間で入居ご本人の人となりを把握する努力を行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	認知症の状態が、日ごと時間ごとに変化する中で、言動に注視することを心がけ、些細な事でも記録に残し、スタッフに伝達する努力をしている。対応出来たことが、次も出来るわけでは無いのがこの現場の難しさでもあり、ちょっとした変化が有する力を発揮することもあることをスタッフは知っており、そのことが理念にも通ずるスタッフのやりがいにもつながっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者が主となり、各入居者個人ごとに担当を設けてモニタリングを行い、その結果を討論し、計画案をユニット毎で話し合い管理者に確認をしている。その上で計画作成がご家族に次の計画の提案を行うようにしている。現在は郵送がほとんどなので、ご家族からの意見を直接確認することが出来ないが、徐々に行って行きたい。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の細かな変化、ご本人の言葉のありのままを記録し、スタッフに言葉で伝え情報共有をチームで行う努力をしているが、スタッフ間でも言葉を受け取る「差」が生じる。動画で表現することが主になった時代、プライバシー保護の観点はあるが、情報漏洩の対策を図った上での記録としての有用性は考えて良いのではと感じる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	各個人ごとのニーズに応じた個別ケアを重視しているが、ワンオペレーションになりがちな性質を持つ事業所であるので、配置できるスタッフが偏ると、対応できないニーズが生まれる。サービス拡充の為に他事業所に依頼すれば事業所もしくはご本人の経済力が問われるケースがある。地域資源の発掘やインフォーマルのサービスを組み合わせることで可能な限りの支援が出来るよう努力していく。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	令和元年に発生した新型コロナウイルス感染症は、地域との繋がりを失うほどこれまでの発想や関わりを変えた。現在でも協働は厳しいものは感じるが、それでも近くの保育園の園児との交流は継続出来ており、新しい協働の在り方を提案できる準備を行っていききたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科主治医の訪問診療を基本に、必要時には専門医の紹介を受けている。これまでは事業所で出来る医療支援は限られたものがあつたが、現在では、訪問看護と薬局とも連携できるようになった。他事業所のサービスを組み合わせることで、ご本人に適した医療支援が図れるよう、今後も努力していく。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療行為が出来ない介護スタッフにとって、医療行為が可能な資格を持つスタッフの存在は、存在そのものに意義を持つ。また、訪問看護ステーションとの連携も可能となり、より専門的な判断や主治医との連携が強化された。ただ、過度な医療的視点にならないよう、しっかりとホームとしての医療の考え方を理解して頂くよう常に確認している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居時の様子を入院生活時に役立ててもらえるよう情報提供している。また、入院中のご本人の様子を事業所スタッフが定期的に電話連絡等確認させてもらいながら医療機関との連携を図る努力をしている。退院時は医療機関から助言を受け、今後のケアの方向性を話し合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご本人の医療的状況をかかりつけ医から助言を受けた内容を伝え、ホームで出来ることと出来ない事を明確にし、必要時にはかかりつけ医からご家族への説明を行い、ご家族とは常に話し合いを持ちながら、同意の上で終末期への迎え方を共有するよう努力している。ご本人やご家族にとって少しでも不安や後悔の少ない最期となるような支援を日々のケアから意識するよう心掛けているが、地域の関係者とのチーム支援については努力が必要である。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	かかりつけ医や事業所の看護師、訪問看護師から緊急時の対応方法や観察ポイントなど適宜指導してもらっている。特に夜間の急変や事故発生時にどのような対応を行えばよいかを各スタッフに日々想定してもらいながら、定期的に対応を見直し改善するよう努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災士の資格を持ったスタッフを中心とした総合訓練や、災害時の対応方法の周知を行っている。また備品のチェックを定期的に行っている。令和6年度からBCP作成が義務付けられるが、今年1月に発生した新型コロナウイルスのクラスターを経験し、地域の応援もお願い出来ない中、対策の必要性を痛感した。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	集団生活の中においても各個人の人格が尊重されるためには、これまでの生活歴からそれぞれが大事にしてきたことを把握した上で関わるのが大事と理解しているが、実現する難しさも感じている。日々の出勤するスタッフの介護力が同一ではないことである。事業所の都合と理解されても仕方のない状況でもあるが、各個人の人格を尊重することは運営理念にもあるので、常に振り返っていきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	希望を相手に伝えることが不安であったり困難な方が生活する場所において、表情や行動、しぐさで気持ちを推し量り、カンファレンスで情報共有した上で対応しても、認知症の周辺症状として出現することも多く、自己決定の難しさを体験することが多い。それでもその時に提供した介護には根拠をもって支援するよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	各個人のその時の気持ちを尊重し、無理強いないせず、ご本人のペースで過ごして頂けるような支援を心がけている。それでも一時的にはあるが、サービス継続のためにスタッフの都合を優先させる時や一時的に適切な人員配置が確保できず、ご本人の言動を制限せざるを得なかった場面があった。背徳の念を抱きながらケアを提供するスタッフの気持ちも考慮したい。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	各個人の有する力に合わせて衣類をご本人で選びやすい環境を整えたり、またはスタッフと共に選ぶことは基本としつつ、いずれも困難な場合はスタッフが選択するが、表情を確認するようにし、少しでも刺激になっていただけるよう配慮している。また、ご家族から情報をもらい、好みの衣類を用意してもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食が楽しくなるよう季節や行事に合わせたメニューの提供を心掛けている。またご本人の力やペースで召し上がって頂けるよう見当識も考慮し、提供する食器の形や色、食事の形態を工夫している。食事の準備や盛り付け等可能な方にはお願いし、ご本人の力が発揮できる環境づくりを提案している。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	高齢者は3食以外に一日1500cc程度の水分摂取が必要とされている。食べる事が問題なくとも水分だけを摂る事には抵抗のある高齢者が多くと認識している。活動的に過ごせる方でも水分を控えることがあり、のどの渇きを感じにくく、水分を必要と感じていない方には味覚が飽きないよう工夫し自発的な摂取になるよう努めている。食べる量は、毎食観察し、その方に合った量、時間や理解力も考慮する支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	誤嚥を起こしやすい方には食前も行い毎食後、その方に合った口腔ケア支援を行っている。また定期的に歯科衛生士や歯科医師の訪問を受け、助言・指導を受けながら行っている。ご自分でできる方は見守りを行いながら、口腔内に残渣物が残らないよう仕上げ磨きを行っている。また、食後のすぐにはなく、食べた味の余韻が少しでも感じられるよう時間は考慮している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	各個人にあった排泄パターンを把握し、トイレでの排泄を勧めることで生活の不快に繋がらないよう工夫している。また使用する排泄用品については、昨今の物価高にて個人負担が増大していることを鑑み、可能な限り出費を抑える努力をしている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	ご本人の能動的行動を優先することで、のどの渇きや空腹を少しでも感じてもらう努力をしている。それでも生活行動範囲が限定してくると、能動的行動が減少し、健常の高齢者でも身体的機能の低下により夜間の排泄を考え必然的に水分を控えることで腸の動きが鈍くなってしまふ。認知症ともなれば他者からの働きかけが必須になり、さらに認知症による症状の出現から服薬することからもっと腸の動きが鈍感となり、必然的な便秘を引き起こしてしまう悪循環がある。認知症と便秘は相反する作用によって引き起こされる解決困難な事案とも考える。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	明治大正生まれから、昭和生まれの高齢者が多くなり、措置時代の異性介護が当然であった羞恥を伴う介護も、個人の多様性を認め合う時代となった現代の介護は、同性介護が基本となりつつある。しかしながら叶わない現実もあり、ストレスを抱え、訴えることが出来ない人がいるということを踏まえ、その人にとってのお風呂を楽しむ定義を考えられる事業所でありたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	各個人の眠りのパターンを把握し、座位姿勢からの解放や浮腫の軽減も兼ねて日中の活動と休息を適度に取り入れて夜間の睡眠につながるよう常に検討している。就寝後もスタッフの都合で発生させる音が無いように気を付け、不必要な働きかけは行わないよう、夜間に使用する排泄用品は考慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤師にアドバイスをいただきながら情報共有を行っている。飲み忘れや誤薬のないようスタッフ同士で声をかけあい、周知徹底を図っている。新しい薬の服用時には状態変化を注意深く観察し、必要に応じて適宜医師へ報告を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ご本人が生活の中でできることを行っている。家事活動の際はスタッフと会話しながら楽しく行えるよう工夫している。ただ、現在入居している方々の生活歴を生かした役割支援には課題があるのが現状。嗜好品はご家族から情報を得て、天気が良ければなじみの入居者の方と屋外の散歩等、楽しみや気分転換になるよう働きかけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	健康や安全へ配慮しながらできる限り本人の希望にそって外出できるよう支援に努めている。ただ現在のコロナ禍にあってはほとんど実現できていない現状がある。コロナの状況をみながら車内や人の少ない屋外など、ごく限られた範囲での外出に留めている。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は管理が困難な方が多く、基本的にはホームが管理することが主である。それでも手持ちのお金があった方が安心できると評価する場合は、ご家族と相談して紛失することもお伝えしたうえで必要な金額をご本人に渡すようにしている。ご家族には面会時に預り金出納帳で適切な支出か確認いただいている。コロナ禍で自由に買い物を楽しめない課題はあるが、可能な限り努力していく。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナ禍であって状況が改善したことの一つにSNSの発展は、ご本人が受話器の前まで行かなくてよい、携帯電話の馴染みがないので話せないといったことがZOOM等で疑似面会になり、さほど不安にならないことは大きい。それでも伝えたい今の気持ちを紙に書いた方が安心する方には、書いていただいている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	各個人の空間認識の理解に応じてなるべく自分で行動が行えるよう、案内板を用意したり、季節の花を飾ったりしている。また馴染みのある熊本の行事や風景の写真を廊下に飾り、会話のきっかけにしたり、様々な空間で感じる刺激の影響を考慮しながら対応している。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	各個人が持つパーソナルスペースを意識したりビング配置を提案し、実際の他者との関わりからどのような反応するかを確認し、微調整を繰り返している。テレビや音楽に集中する方や自らソファに座る方、台所の発する音に心地よさを覚える方等、それぞれに落ち着く場所になる様工夫している。自ら環境を変えることが難しい、共用空間が適切でないとチームアセスメントした時は居室も有効に活用し、少しでも穏やかな気持ちで過ごせる工夫を行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅でこれまで使用していた家具や道具を備えることで、空間は違えど、自分が使っていたという記憶を生かして居心地よくとは考えているが、ご本人の状態や家具の大きさは検討している。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	カレンダー等は入居者の方からみて分かりやすく、見やすい位置を検討し、見当識の支援につなげている。安全に安心して生活が営めるよう、居室や廊下、共有スペースの導線を考え、ソファやテーブル等を配置し、少しでも危険が少ない環境に努めている。		